

研究種目: 基盤研究(B)

研究期間: 2006~2009

課題番号: 18320005

研究課題名(和文) 知識・行為・制度をめぐる「因果性」と「志向性」の哲学的解明

研究課題名(英文) Philosophical Investigations on the Contrast between Causality and Intentionality concerning Knowledge, Action, and Institution

研究代表者

一ノ瀬 正樹 (ICHINOSE MASAKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号: 20232407

研究成果の概要(和文): 「因果性」と「志向性」という、生成に関する伝統的な二つの原理について、知識や認識に関わる理論的側面、行為や自由・責任につながる実践的側面、そして制度や規範・法に関わる社会的側面の、三つのアスペクトからアプローチをすることによって、説明、理解、合理化、正当化、というおよそ人間の活動であるならいかなる場面にも当てはまる普遍的な事態の構造を解明し、多様な学問領域の橋渡しを行った。

研究成果の概要(英文):

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2009年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
総計	9,800,000	2,940,000	12,740,000

研究分野: 哲学

科研費の分科・細目: 哲学

キーワード: 知識・行為・制度・因果性・志向性・目的・理由・正当化

1. 研究開始当初の背景

本研究の主題設定のきっかけは、『知識と行為』(黒田亘、東京大学出版会、1983年)における因果性と志向性の対比についての傑出した分析にある。また、*The Nature of Rationality* (R.Nozick, Princeton University Press, 1993)も本研究のバック

グラウンドとなる、きわめて影響力の大きい書物である。この二つの著作をいわば橋渡しをし、因果性と志向性の対比という問題意識をノージックが現代哲学の先端のなかに持ち込んだ意思決定理論や進化論的認識論というテーマへと適用していくことが必要とされていた。

2. 研究の目的

本研究は、「因果性」と「志向性」という二大生成原理の対比を特に主題化することを通じて、哲学の諸問題を貫通する一つの大きな道筋をつけ、さらにはそのことによって哲学研究の諸学問領域への応用の可能性を具体的に広げていくことを目的とする。理論と実践という伝統的な領域区分はいうまでもなく、制度や組織といった分野にまで射程を広げても、そこには「何々だからこうなる」「こうなるために何々する」といった生成のダイナミズムの言語が隔々にまで入り込んでおり、そうしたダイナミズムそのものを主題として取り上げるというのは前例があまりなく、本研究の独創的な視点である。さらには、哲学研究のなかに「意思決定理論」の研究というテーマを重大な核としてもちこんだことも本研究の独創的な特徴である。

3. 研究の方法

本研究に先だって遂行された科学研究費による研究「事実・行為・規範をめぐる知識の実践的研究—「自然と人為」の対比についての哲学的再検討」を承けて、そこでの研究成果を「因果性」と「志向性」という、生成をめぐる哲学の伝統的な対概念に適用し、そのことで、理論哲学の多様な主題、そして実践哲学的な諸問題に新しいパースペクティブをもたらすことを目論んだ。

4. 研究成果

「因果性」と「志向性」という、生成に関する伝統的な二つの原理について、知識や認識に関わる理論的側面、行為や自由・責任につながる実践的側面、そして制度や規範・法に関わる社会的側面の、三つのアスペクトからアプローチを行った。そして、説明、理解、合理化、正当化、というおよそ人間の活動であるならいかなる場面にも当てはまる普遍的な事態の構造を解明することができ、以下に挙げたような多数の研究成果を公表した。この研究により、多様な学問領域の橋渡しをするという哲学固有の課題をはたすことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 24 件)

- ① 松永澄夫 「文化としての弁当」、vesta No. 62、味の素 食の文化センター、2006年、40-43 頁、査読無
- ② 高山 守 「生命とは何か——因果関係を問い返しつつ」、『死生学研究』2006年春号、東京大学大学院人文社会系研究科、2006年、32-57 頁、査読無
- ③ 高山 守 「シェリング」、『哲学の歴史』第7巻、中央公論新社、2006年、509-584 頁、査読無
- ④ 高山 守 「ラッセルの因果論とヘーゲル」、『理想』第679号、理想社、2006年、73-83 頁、査読無
- ⑤ 一ノ瀬正樹 「動物実験と Animal Rights」、『ヒトと動物の関係学会誌』第19号、ヒトと動物の関係学会、2007年、10-14 頁、査読無
- ⑥ 一ノ瀬正樹 「個人と人格との相克—刑事責任に見る近代の自律的人間観の陥穽とその超克」(付：韓国語訳、金光来訳)、『論集』26、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2008年、38-53 頁、査読無
- ⑦ 一ノ瀬正樹 「生命現象における決定性と偶然性—遺伝子決定論から自然選択／遺伝的浮動の対比まで—」、『哲学研究論集』第5号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2008年、1-64 頁、査読無
- ⑧ 松永澄夫 「脱自然化する食と農の真似事」、『環境思想・教育研究』第2号、環境思想・教育研究会、2008年、3-7 頁、査読無
- ⑨ 松永澄夫 「生じることと生じさせることとの間」、『論集』26、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室、2008年、1-20 頁、査読無
- ⑩ 天野正幸 「実現不可能な理想国家と実現可能な理想国家」、『論集』26、2008年、21-37 頁、査読無
- ⑪ 鈴木泉 「非人間主義の哲学—ピエール・モンテベロの仕事めぐって」、『死生学研究』第9号、2008年、82-96 頁、査読無
- ⑫ 鈴木泉 「力能と「事象性の度合い」—スピノザ『デカルトの哲学原理』第一部定理7に関する覚書」、『論集』26、2008年、74-90 頁、査読無
- ⑬ 鈴木泉 「「形而上学」の死と再生—近代形而上学の成立とその遺産—」、『岩波講座哲学 02 形而上学の現在』、2008年、49-73 頁、査読無
- ⑭ 鈴木泉 「スタイルとリトルネロ——メルロ＝ポンティとドゥルーズ」、『思想』2008年第11号、2008年、256-274 頁、査読無
- ⑮ Akira YOSHIDA : The Problem of Prebeing

- and the Structure of Self-affection in Husserl's Phenomenology, Philosophical Studies XXVI, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2008, pp.91-106、査読無
- ⑯ Masaki ICHINOSE : Wittgenstein and Meaning as Cause: A Philosophically 'Uncertain' Investigation, Philosophical Studies XXVII, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2009, pp.1-8.、査読無
- ⑰ Masaki ICHINOSE : Plato on Moral Dilemmas: On Schofield's arguments in his 'The Rule of Knowledge', Philosophical Studies XXVII, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2009, pp.9-13.、査読無
- ⑱ Masaki ICHINOSE : The Paradox of a Dead Person, The Journal of Applied Ethics and Philosophy Vol.4, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2009, pp.1-15.、査読無
- ⑲ 一ノ瀬正樹「生命現象に基づく「自由」理解についての一考察」、『哲学研究論集』6号、1-27頁、査読無
- ⑳ Masaki ICHINOSE : Counterfactuals and Degrees of Truth, Philosophical Studies, Department of Philosophy, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, 2010, pp.1-8.、査読無
- 21 Mamoru TAKAYAMA : Was ist die Zukunft der Geschichte? Ein Erdbeben für Hegel, Prognosen über Bewegungen, 2009, pp.121-134. 査読無
- 22 榎原哲也「看護ケア理論における現象学的方法——ナミン・リー「現象学と質的研究の方法」に寄せて」、『死生学研究』第12号、2009年、35-48頁、査読無
- 23 Tetsuya SAKAKIBARA : Husserl on Expression and Phenomenological Description, 『哲学與文化』, No. 419, 2009, pp. 51-69. 査読有
- 24 鈴木泉「力能と人間—アントニオ・ネグリ『野生のアノマリー』をめぐって」、『別冊情況』第三期第一〇巻第七号、2009年、171-180頁、査読無

[学会発表] (計15件)

- ① Masaki ICHINOSE : Vagueness of Free Will, The XXII World Congress of Philosophy, Seoul National University, Seoul, Korea, 31 July 2008.
- ② Masaki ICHINOSE : An Epistemology of Responsibility: A Probabilistic Approach, Lecture Series: Philosophy and Public Policy, London School of Economics, UK, 17 November 2008.
- ③ Masaki ICHINOSE : A Dilemma over Mentally Disordered Offenders, Research Seminars, Department of Philosophy, Durham University, UK, 4 December 2008.
- ④ Masaki ICHINOSE : Uncertainties over Medical Diagnoses of Mentally Disordered Offenders, 2008 Carnegie Uehiro Oxford Conference, St Cross College, The University of Oxford, UK, 11 December 2008.
- ⑤ 松永澄夫「体の規範と柔軟性 - 健康と病気の間」、生存科学研究所、生存科学研究所会議室、2008年9月18日
- ⑥ 一ノ瀬正樹「戦争をめぐる事実と規範」、死生学ワークショップ「戦争と戦没者をめぐる死生学」第4セッション「戦争の倫理」、東京大学文学部、2009年6月6日
- ⑦ Masaki ICHINOSE : Hume's Determinism Undetermined, the Lectures of Distinguished Scholar, Seoul National University BK21 Group for Philosophical Education and Research, Seoul National University, Seoul, Korea, 17 July 2009.
- ⑧ Masaki ICHINOSE : Counterfactuals and Degrees of Truth: Comments on Professor Timothy Williamson's arguments in 'Knowledge of Counterfactuals', International Meeting of Hongo Metaphysics Club, The University of Tokyo, October 2, 2009.
- ⑨ 一ノ瀬正樹「エピクロスの死無害説からする死刑論再考」、「ギリシア政治哲学の総括的研究」科研費研究集会、首都大学東京、2009年10月4日
- ⑩ 一ノ瀬正樹「殺人の被害者とは誰か - 死のメタフィジックスの断面-」、第19回白山哲学会、東洋大学、2009年10月24日
- ⑪ 一ノ瀬正樹「バークリの視覚論から数学論へ」、哲学会第48回研究発表大会、東京大学、2009年11月1日

- ⑫ 松永澄夫 「食の哲学地図から見た健康食品」、第79回日本衛生学会（日本学術会議パブリックヘルス科学分科会と合同）、北里大学、2009年4月1日（概要：『日本衛生学雑誌 Vol.64』No.2、日本衛生学会、257頁）
- ⑬ Tetsuya SAKAKIBARA : “Phenomenology in a different voice - Husserl and Nishida in the 1930's”, The conference on the occasion of the 150th anniversary of Edmund Husserl's birth “Phenomenology - Sciences - Philosophy”, April 3, 2009, Husserl-Archives Leuven, Leuven, Belgium.
- ⑭ Tetsuya SAKAKIBARA : “The Experience of Illness and the Phenomenology of Nursing”, The international conference “Space of Phenomenology: to the 150th Anniversary of Edmund Husserl”, May 26, 2009, Russian State University for the Humanities, Moscow, Russia.
- ⑮ Masaki ICHINOSE : Ontology and Ethics of Killed People, The 4th BESETO Conference of Philosophy: The Future of Philosophy in East Asia, Seoul national University, Seoul, Korea, 7 January 2010.

〔図書〕（計16件）

- ① 一ノ瀬正樹 『原因と理由の迷宮 - 「なぜならば」の哲学』、勁草書房、2006年、全317頁
- ② 松永澄夫 『音の経験—言葉はどのようにして可能となるのか—』、東信堂、2006年、全391頁
- ③ 松永澄夫 『環境—設計の思想』(編著)、東信堂、2007年、全285頁（分担部分：「はしがき」pp. i-ii.・「環境に対する要求と設計の主体」pp. 3-40.）
- ④ 松永澄夫 『人間はどこに行くのか』、学文社、2007年、全263頁（分担部分：「情報の海という人工世界の中で」pp. 228-232.）
- ⑤ 松永澄夫 『哲学の歴史』全12巻・別巻1（編集委員）、中央公論新社、2007-2008年、第6巻（分担部分：責任編集・総論その他）
- ⑥ 一ノ瀬正樹 『岩波講座哲学02 形而上学の現在』、共著、岩波書店、2008年（担当部分・「曖昧性のメタフィジックス」、pp. 187-212.）
- ⑦ 一ノ瀬正樹 『死生学 [5] 医と法をめぐる

- 生死の境界』（高橋都氏との共編著）、東京大学出版会、2008年（担当部分・「はじめに」pp. 1-6、「加害と被害をめぐる生死の境界」pp. 145-164.）
- ⑧ 松永澄夫 『哲学史を読む I』、東信堂、2008年、全389頁
- ⑨ 松永澄夫 『哲学史を読む II』、東信堂、2008年、全383頁
- ⑩ 松永澄夫 『環境—文化と政策』(編著)、東信堂、2008年、全316頁（担当部分：「はしがき」pp. i-iii.・「眼差しを見せる—地域の孤立が許されない時代の自然・文化・政策」pp. 3-27.）
- ⑪ 松永澄夫 『言葉の働く場所』、東信堂、2008年、全249頁（担当部分：「はしがき」pp. i-iv.・「意味世界は価値世界である」pp. 3-40.）
- ⑫ 松永澄夫 『隙間～自然・人間・社会の現象学～』、国際高等研究所、2008年、全121頁（担当部分：「隙間という概念の効用」pp. 11-16.）
- ⑬ 松永澄夫 『言葉は社会を動かすか』、東信堂、2009年、全290頁（担当部分：「はしがき」p. i・「時代を表す言葉社会の変化」pp. 3-43.）
- ⑭ 高山 守 『因果論の超克—自由の成立のために—』、東京大学出版会、2009年、全260頁
- ⑮ 榊原哲也 『フッサール現象学の生成—方法の成立と展開—』、東京大学出版会、2009年、全472頁+112頁
- ⑯ 一ノ瀬正樹 『功利主義と分析哲学—経験論哲学入門』、放送大学教育振興会、2010年、全280頁

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

一ノ瀬 正樹 (ICHINOSE MASAKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20232407

(2) 研究分担者

松永 澄夫 (MATSUNAGA SUMIO)

立正大学・文学部・教授
研究者番号：30097282

天野 正幸 (AMANO MASAYUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：40107173

高山 守 (TAKAYAMA MAMORU)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20121460

榊原 哲也 (SAKAKIBARA TETSUYA)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：20205727

鈴木 泉 (SUZUKI IZUMI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：50235933

吉田 聡 (YOSHIDA AKIRA)

千葉工業大学・情報科学部教育センター・
助教
研究者番号：90451781

(3) 連携研究者

中 真生 (NAKA MAO)

神戸夙川学院大学・観光文化学部・准教授
研究者番号：00401159